奈良・平城宮跡（第二〇次）

1 所在地　奈良市佐紀町
2 調査期間　一九六四年（昭39）七月～十一月
3 発掘機関　奈良国立文化財研究所
4 調査担当者　樋本亀治郎
5 遺跡の種類　宮殿・官衙遺跡
6 遺跡の年代　奈良時代～平安時代初期
7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

平城宮跡第二〇次調査は、第一〇・一一・一三次調査とつづいた推定第二次内裏の北外郭の調査をしめくくる意味をもって、一九六四年（昭和39）、北外郭中央区の東半部において実施された。北外郭は推定第二次内裏内郭の北面築地回廊と内裏外郭の北を限る築地とにはさまれた東西に長い地域であるが、諸調査の結果、その中央区は四辺を築地に囲まれた一つの官衙区域をなしていることが明らかとなった。北外郭中央区は、南北塀や遺構の配置によってその内がさらに東半部・西半部に二分されており、西半部には建物群が整然と配されていたが、東半部では建物は少なく広い空地となっていた。そして、この東半部の南端近くにおいて、一〇個の土壙が密集して検出され、そのうちの三つの土壙から木簡の出土がみられたのである。以上のような遺構のあり方から、北外郭中央区の官衙は、建物群と作業場的空間により構成されていることが知られた。この官衙は、第一三次調査出土の墨書土器の記載（「内裏盛所」）から、内膳司の可能性が指摘されている。

土壙ＳＫ二一〇一は、東西三・五ｍ、南北三・四ｍ、深さ〇・九ｍのほぼ正方形のプランをしている。埋土は上下二層に分けられ、二度の塵芥投棄が行なわれているが、木簡はこのうち下層の最下部から木製品・瓦・土器とともに出土した。点数は総計三九四点であり、うち約七〇％が削屑であった。木簡にみえる年紀は天平一八年（七四六）・天平勝宝二年（七五〇）、「勝宝」の三点があり、他方出土土器が同じ平城宮土器編年の「平城宮Ⅲ」であることから、多くの木簡を出土した第一三次調査の土壙ＳＫ八二〇（天平一九年をさほど降らない）に近い天平勝宝年間に埋没年代を考えることができる。伴出した木製品は刀形等の祭祀具、木針・火鑽臼等の工具、杓子・箸といった食膳具、枘等の加工のある部材など豊富であり、注目される。

土壙ＳＫ二一〇二は、土壙ＳＫ二一〇一の東北方にある大きな浅いくぼみ（ＳＫ二一〇〇）の中に掘られた八個の土壙のうちの一つであり、平面は東西三・八ｍ、南北二・四ｍの不整形をし、深さは〇・三ｍである。埋土は上下二層に分けられ、その上層から木簡一一一点が大量の檜皮・木材片とともに出土した。木簡の中には木材や

扉金具の進上についてのものがあり、木材片・檜皮が大量に出土したこととあわせて、本土壙がこの地区の造営にともなう廃棄物の処理用であったことが推定される。埋没年代は、掘り込まれた層位の違いから、先の土壙SK二一〇一よりも古いことが知られ、紀年木簡をみても神亀五年（七二八）と天平元年（七二九）に四点が集まっており、その時点をあまり降らない時期の土壙と考えられる。

もう一つの木簡出土土壙SK二一〇七は、右の土壙SK二一〇二の東北方にあり、同じく大きな浅いくぼみ（SK二一〇〇）の中に掘り込まれている。平面はほぼ方形で、東西三m、南北二・一m、深さ〇・三mを計る。土壙内の最下層の檜皮を主とした有機質層から木簡一七点が出土している。檜皮が多く投棄されており、SK二一〇二と同じく造営時の塵芥処理用の土壙と考えることができる。

8　木簡の釈文・内容

SK二一〇一土壙

(1)・「請飯番長二人 舎人十七人 蔵部一人 史生一人 右依例所請如件」
　・「　十一月七日安曇田主　」　189×32×4　011

(2)・×□　蔵マ小宅美□人史生□□×
　・×□　納綿三屯　(108)×(8)×1　081

(3)・「従常宮 請雑物」
　・「二年」　90×24×6　061

(4)「〈若狭國遠敷郡青郷御贄貽貝一塊」　125×24×3　032

(5)・×□〔若カ〕狭國遠敷郡木×
　・　天平勝寶二×　(102)×(29)×4　019

(6)・「□□里戸主額田部方見戸 額田部羊御調塩三斗」
　・「　天平十八年九月□日」　130×24×4　011

(7)□採薪十一荷立丁□〔三カ〕廝八人×　091

(8)「〈飛炎架釘六十」　154×29×5　032

(9)飛炎宇助釘七十□×　(115)×(18)×3　081

SK二一〇二土壙

(10)・「泉進□〔上カ〕材十二條中桁一條 又八條□×
　・「　付宿奈麻呂　(161)×56×4　019

(11)「邊附六枚□□□□□□□□」　148×(7)×4　081

(12)・「〈越前國大野郡調錢」
　・「〈□貫　天平元十月廿一日」　72×24×3　032

(13) □□平釘□×　091

(14)・「〈播磨國佐用郡調錢一□〔貫カ〕」
・「〈　天平元年　」　111×(9)×4　032

(15) ×周岐里海部調海藻六斤神龜五年〈」　(98)×29×2　039

(16) 「沙山進上交易材□」　103×32×4　011

(17)・「北□所進擧鍬十六隻長三寸半□尻塞卅四枚　牒□六隻長四寸鐶二隻　」
・「位并尻塞四枚合卅二斤　本受鐵卌三斤十兩損十一斤十兩神龜六年三月十三日足嶋」『了』　303×49×4　011

SK二一〇七土壙

(18) 「〈河原郷□□君山中三斗□□〔子カ〕真人三斗」　181×(16)×3　032

土壙SK二一〇一出土木簡をみると、(1)・(2)は蔵部の飯の請求・綿の収納に関する文書木簡。(3)の木簡は題籤軸である。「常宮」は『万葉集』の題詞（四三一〇番）に「東常宮南大殿」ともあるが、不詳。(8)は飛炎垂木を打ちつける釘の付札。土壙SK二一〇二の木簡では、建築部材関係の記載が注目される。(10)は泉津からの木材進上の文書であり、(16)も交易材の進上を記す。(11)の「辺付」は扉構えの部材、(17)の「挙鍬」（アゲカスガイ）・「牒」・「尻塞」・「鐶」等の鉄金具も扉に付属するものと考えられる。なおこの(17)は造営の年紀をも記しており、本土壙の年代を示唆している。

9　関係文献

田中　琢　「昭和39年度平城宮調査出土の木簡」（『奈良国立文化財研究所年報一九六五』）一九六五年

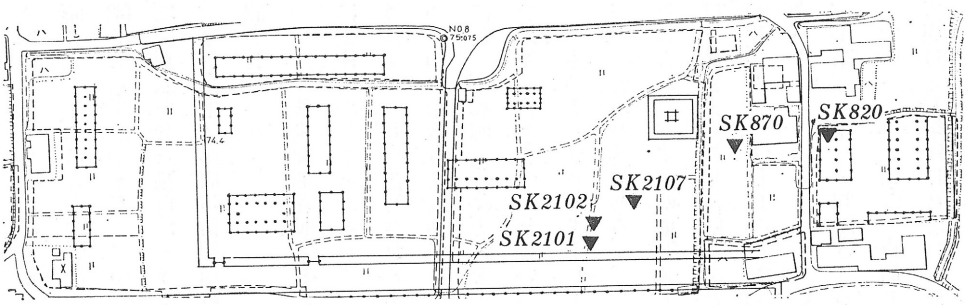
横山浩一　「昭和39年度平城宮跡発掘調査概要」（同右）一九六五年

奈良国立文化財研究所　『平城宮跡昭和39年発掘調査概要』一九六五年

同　『平城宮木簡二』一九七四・五年

同　『平城宮発掘調査報告Ⅶ』一九七六年

（佐藤　信）



平城宮跡推定第二次内裏北外郭木簡出土地点図